

六祖壇經

六祖坛经

(唐) 惠能 著

(日) 桂明佳 (译)



華文出版社
SINO-CULTURE PRESS



缘起

《六祖坛经》记载了一位觉悟者的开示，惠能觉悟了本来具足的佛性，释迦牟尼在觉悟之后，感叹原来众生都有这个佛性。对不再满足于富华人生、发愿了生死的修行者来说，这是直指人心、言下顿悟的教法。

众生皆有佛性，只是无知而已。认知到自己的无知，才能放下无知。如同点灯照明，原有黑暗并非躲别处，黑暗只是没有灯光的状态。

六祖寺方丈释大愿发愿弘扬六祖禅宗，刊印11种外文版的《六祖坛经》，愿海内外众生，闻到甘露，滋润生命。



译者

桂明佳（中文名）1965年出生于中国，大学毕业后到日本留学，取得濠岛大学信息工程学硕士学位。

六祖壇經

六祖坛经

(唐) 惠能 著

(日) 桂明佳 (译)

图书在版编目(CIP)数据

六祖坛经：汉、日 / (日) 桂明佳译. — 北京：华文出版社，2015.3

ISBN 978-7-5075-4322-3

I. ①六… II. ①桂… III. ①禅宗－佛经－中国－唐代－汉、日 IV. ①B946.5

中国版本图书馆CIP数据核字(2015)第038920号

六祖坛经

作 者：惠能

译 者：[日本] 桂明佳

责任编辑：杨宁

出版发行：华文出版社

社 址：北京市西城区广安门外大街305号8区2号楼

邮政编码：100055

投稿邮箱：kaiyu118@163.com

电 话：总编室 010-58336239 责任编辑 010-58336258

发行部 010-58336270

经 销：新华书店

印 刷：北京时捷印刷有限公司

开 本：140毫米×210毫米 1/32

印 张：8.75

字 数：166千字

版 次：2015年9月第1版 2015年9月第1次印刷

书 号：ISBN 978-7-5075-4322-3

定 价：24.00元

版权所有 侵权必究

编译委员会

顾问委员 (以姓氏笔划为序):

一诚长老 王 尧 传印长老 那仓道尔吉
岛山长老 杨曾文 星云长老 楼宇烈

Bour Kry (布格里大僧王 柬埔寨)

Kumarabhivamsa (库马拉毕万萨长老 缅甸)

Maha Phong SAMARUKS (玛哈·冯·撒马鲁科斯长老 老挝)

Phallop Thaiarry (攀洛·泰阿利 泰国)

Phramaharatchamangkhlan (帕马哈拉差芒克蜡蝉长老 泰国)

Phraphrommethee (拍蓬美提长老 泰国)

Rajakeeya Panditha Galagama Dhammasiddhi Sri Dhammananda Aththadassi Thera
(噶拉嘎玛·斯瑞·阿塔达西长老 斯里兰卡)

Thich Nhat Tu (释日慈法师 越南)

Yingluck Shinawatra (英拉·西那瓦 泰国)

主任委员: 韩方明

委员 (以姓氏笔划为序):

大愿法师 大黑虚空 王启龙 王雅玉 无峰法师
吕凤鼎 关呈远 朱奕龙 仲巴·南卡嘉措
传正法师 纯一法师 吴为山 吴思科 张九桓
张忠义 陈洪强 明生法师 郭招金 悟觉法师
黄友义 萨顶顶 韩美林 登觉法师 詹树兴
演觉法师 演法法师



六祖壇經

(日) 桂明佳 (かつら みか)



悟りの境地には樹はない、
澄んだ鏡も台もない
本来から何一つないのに、
何処に塵や埃が着くのだ



目錄

第一章	自序品	001
第二章	般若品	021
第三章	決疑品	037
第四章	定慧品	047
第五章	妙行品	055
第六章	懺悔品	059
第七章	機緣品	073
第八章	頓漸品	103
第九章	護法品	115
第十章	付屬品	121



第一章 自序品





「すべてのものは、自性と切り離せない

どうして自性が本来から清浄だったと
期待したのだろう、

どうして自性が本来不生不滅だったと
期待したのだろう、

どうして自性が本来から完全だったと
期待したのだろう、

どうして自性が本来から動揺しないと
期待したのだろう、

どうして自性が本来から万物を創ると
期待したのだろう」

法は心から心へ伝わるものであり、
皆が自ら悟り、自ら理解するものである。

昔から、仏陀から仏陀へは本体を伝え、
祖師から祖師へは密に本心を託してきた。

1.1 大師が宝林寺に入山すると、韶州の刺史韋璩と官僚が寺を訪れ、街にある大梵寺の本堂で一般庶民に説法をしてくれるようお願いをした。法座に座ると集まってきた刺史官僚三十余人、儒教の学士二十余人、比丘、比丘尼、道教の修行者と一般の在家の人たち合わせて千余人が一斉に拝礼し、仏教の重要な教えについて話してくれるようお願いした。

1.2 大師は話し始めた。

「みなさん（原語は善知識）、菩提自性は、本来は清浄であり、この心だけを使えば、すぐに仏性に到達します。私恵能がどのように法に到達したかについて話しますのでお聞きください。

私の父は范陽出身で厳格な人でした。官吏の職を剥奪されて嶺南へ流され、新州で百姓をして暮らしました。不幸なことに、父は私がまだ幼い時に亡くなり、孤独に残された私と母は南海へ移転しましたが、辛い貧困に苦しみ薪を売って暮らしました。

1.3 ある日、私が薪を背負って市場へ売りに行くと、ある客が店まで届けるように言うので、薪を届けて代金を受け取って門を出たところ、店の近くで経を誦えている男に出会いました。私は、その経文を聞いただけで、たちまち心が明るくなりました。

男に誦えている経の名前を尋ねると、その経は「金剛經」



だと分かりました。

私は続けてその男に、どこから来たのか、なぜ一人でこの経を誦えているのか再び聞きました。

男は、「蕪州黄梅の東禅寺から来た。現在の住職は五祖弘忍で、教えを受ける弟子はおよそ千人いる。私は中に入ってお礼をしてからこの経を受け取りました。大師は常に僧俗の大衆に、《金剛經》だけを持っていれば、自ら本性が見え直に成仏すると話された。」と言いました。

1.4 私が話を聞いていると、前世からの因縁があったからか、ある人が銀十両を取り出してくれした。そしてお金を老母の衣食に当てるようにし、さっそく黄梅に行って五祖にお会いするように勧められました。私は母のための手配を済ませてから黄梅に旅立ちました。私は三十日足らずで黄梅に到着し、五祖にご挨拶をしました。

五祖大師は私に、「お前は何処から来た者で、何を望んでいるのか」と訊かれました。

私は「嶺南新州の百姓です。大師にお会いするためにはるばるとやってきました。ただ仏になる為で、それ以外には何も望みません」と答えました。すると大師は、「お前は嶺南のもので、しかも獼猴である。どうして仏になれるのか」と言われました。

私が、「人間には南と北の区別がありますが、仏性にはもともと南北の違いはありません。獼猴という身分は和

尚様とは違いますが、それぞれの仏性にはどんな差別があるのでしょうか」と申し上げました。

1.5 五祖大師はまだ何かお話したような様子でしたが、回りに大勢の修行者達がいるのに気付かれると、やむなく私に大衆について作務をするようにと命じられました。

私は大師に、「私は、自分の心がいつも智慧を生じ、自性を離れないことこそが福田だと思います。和尚はいたい私にどんな作務をさせようとされているのですか」と申し上げました。

すると大師は、「この野蛮な者の根性は非常に鋭い。お前はそれ以上のことは言うな。納屋の庭園の作務に着きたまえ」と言われました。

裏の庭まで下がって行くと、一人の寺男がいて、薪を割り、臼を踏んで穀物を搗くことに当てられました。

1.6 八ヶ月余り経った頃のある日、五祖大師はふと私の所に現われ、「お前の件所はものになると思うが、悪人らがお前に危害を加えることを心配して、あえてお前と話すのを避けていたが、お前は分かっているか？」と言われました。

そこで「私も師の心意が分かったので、和尚のお部屋あたりに近づけず、人に気付かれないようにしてきまし



た」と申し上げました。

ある日、大師は弟子たち全員を呼び集めました。そして、「世間の人にとって生死は一大事である。それなのにお前達は毎日福田を求めるばかりで、如何に生死の苦海から断ち放れるかを求めている。本性が迷っては、どうやって福を救えるだろう？ 貴方たちは其々帰って自らの智慧を見出し、各自の本心である般若の本性を掴み、各自一つの偈を作って私に見せに来い。大意を悟っているものであれば、その人に宗祖伝来の袈裟を授け、六代目の宗祖とする。急ぐので早く行け、ぐずぐずと遅れてはならぬ。あれこれ考えるのは役に立たない、本性が見える人には言下に見えてこなければならない。そういう人であれば、刀を振り回す戦場でも本性が見えるはずだ」と言われました。

1.7 命令を受けた弟子たちは退席しながらお互いに、「心を清めわざわざ偈を作る必要はない。和尚様に提出したところで、何の利益があるだろう？ 上座の神秀が現に我々の教授師であり、きっと彼が衣法を得るに違いない。私たちがやたらに偈を作っても無駄な心遣いをするだけだ」と言い合いました。このような話を聞いた人達は皆心を安じ、「これから我々は神秀一人に依るのに、煩わしく偈を作ってどうする」と言いました。

神秀は一人で、「偈を提出しない人たち皆は、彼らの教授師である私の為である。だから私は必ず偈を作って和

尚に提出しなければならない。もし偈を提出しなければ、大師は私の心の中の悟りがどれくらい深いか浅いかを知ることができないだろう。もし私が偈を提出する心が法を求めるためなら善いことであり、祖師の地位を求めるのであれば悪いことであり、却ってそれは凡夫の心で大師から祖師の地位を奪い取る行為に違いない。もし偈を提出しなければ、どうしても法を得ることができない。困った、困った」と思いました。

五祖の御堂前には、三間の廊下があり、供法の盧珍を招いで廊下の壁に「稜伽經」の絵図と、五祖に至るまでの法脈図を描いて、世々代々供養できるようにしようとしていました。

1.8 神秀は偈を作り終わり、何度も大師に提出しようとしたが大師のお部屋の前まで来ると、心が恍惚になり、全身から汗が溢れ出、提出しようもできず、前後四日が経つ間、十三回も試みたが偈を提出することが出来ませんでした。

神秀は、「いっそうのこと、廊下に偈を書きつけ、大師がご覧になれるようにする方がいい。もし大師が良いと言われたらすぐ出て礼拝をし、私が作ったものだと言おう。もし大師にこれは使い物にならないと言われたら、この山にいた数年間に人から敬われたのも不当であり、これ以上に何の修行ができるだろう」と一人で考えました。

その日の真夜中、神秀は人に気付かれないように自分



で燈火をつけ、南側の廊下の壁の間に偈を書きつけて心中の所見を表明しました。

1.9 その偈は：

身体は菩提樹、心は澄んだ鏡台の如し、

いつも念入りに磨きをかけ、塵や埃を着かせない。

神秀は偈を書き終わるやいなや部屋に戻ったので、誰も気付く人はなかった。神秀は、「大師が明日偈を見て喜ばれるのであれば、それは私が仏法と縁がある証である。もし大師がこれはまだものになってないと言われたら、それは私が迷っているからであり、前世の悪行が重く、仏法を得るには相応しくないからである。聖人の心意は実に計り知れない」と思っていた。部屋の中で思いを巡らせると居ても立っても落ち着かないまま明けがたになってしまいました。

五祖弘忍大師は既に神秀がまだ仏法の門に入れる悟りには至ってないので、自性が見えてないことを知っていました。

1.10 夜が明けると五祖大師が盧珍を呼び出し、南の廊下の間に絵を描かせようとした時、ふと偈頌に目が留まると、盧珍に「絵を描く必要はなくなりましたが遠来の労をねぎらおう。金剛経には、『あらゆる形のあるものはみな虚妄である』とある。しかしこの偈はこのまま残しておき、人々が誦えて覚えるようにさせよう。この偈

に従って修行すれば、悪道に落ちることを免れる。この偈に従って修行すれば、大きな利益がある。弟子たちに焼香して敬意を表すようにさせ、皆がこの偈を誦え続けると、やがて見性が得られる」と告げました。弟子たちは偈を誦え、皆が「素晴らしい」と賛嘆しました。

1.11 その日の真夜中、五祖大師は神秀を部屋に呼び、「その偈を書いたのはあなたか」と問いました。神秀は、「私が作ったのは事実ですが、祖師の地位を望んでいる訳ではありません。どうかこの弟子を哀れみ、私に多少の智慧があるかどうかを見て欲しいです」と答えました。

五祖弘忍大師は神秀に、「あなたが作ったこの偈はまだ本性が見えてない、ただ仏法の門前に来ただけで、まだ門の中に入ってはない。もしこの見解で、最高の悟りを求めても、それを得ることは明らかに不可能だ。最高の悟りに到るには、必ず言下に自己の本来の心が分かるようになり、自己の本性が見えなければならない。自己の本性は不生不滅で、全ての時の中にあり、常に自ら見えてくる。全ての物事に遮るものはなく、一つが真実であれば全てが真実となる。全てのもの自体はあるがままであり、あるがままの心こそが真実である。もしこのように見えるなら、それは最高の悟りの自性である。君は今すぐ戻って一、二日もっと考え、新たに偈を作ってみて来い。もしその偈が仏法の門に入るに相應しい悟りを得ていたら、伝法の衣装を授けよう」と言われました。

